

【 生神女進堂祭の讃詞 第4調 】

こんにちかみのめぐみはしめされ、ひ
 今日 神 恩恵 示 人
 とびとのすくいはずたえらる。どうてい
 人 救 傳 童 貞
 ぢよはあきらかにかみのでんにあらわれ、
 女 明 神 殿 現
 あらかじめハリストスをしゅうじんにしらしむ。
 預 衆 人 知
 われらもこえをあげてかれによばん。ぞう
 我 等 聲 揚 彼 呼 造
 ぶつしゅのおもんばかりとじょうじゅなるものよ、
 物 主 思 慮 成 就 者
 よろこべよ。

【 生神女進堂祭の小讃詞 第4調 】

こうえいはちちとことせいしんにきす、
 光 榮 父 子 聖 神 歸
 いまもいつもよよに、アミン。
 今 何 時 世 世
 きゅうせいしゅのいときよおきでん、いたりて
 救 世 主 最 淨 殿 至

と お と き み や 、 か み の こ う え い の せ い に
 貴 宮 神 光 榮 聖
 せ ら れ し ほ う ぞ う た る ど う て い ぢ よ お は
 宝 蔵 童 貞 女
 こ ん に ち し ゆ の い え に い れ ら れ て 、 せ い し ん の お ん ち よ
 今日 主 家 入 聖 神 恩
 う を と も に い ら し む 。 か み の つ か い ら 等
 共 入 神 使
 は か れ を う た い て い う 、 こ れ て ん の ま く
 彼 歌 曰 此 天 幕
 な り 。

司祭) (黙誦： ^{せい かみ せいじゃ うち いこ} 聖なる神、^{せいさん こえ もつ かしよう} 聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
^{さんえい ことごと てんぐん ふくはい ばんぶつ む ゆう} ヘルヴィムより讚榮せられ、^{ひと なんぢ ぞう しょう よ つく なんぢ もろもろ たまもの もつ これ かざ} 悉くの天軍より伏拝せられ、萬物を無より有と
^{ねが もの ちえ めいご あた つみ おこな もの す そのすくい ため つうかい} なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、
願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行ふ者を棄てずして、其救の爲に痛悔
^{た われらいや ふとう なんぢ しょぼく こ とき おい なんぢ せい} を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な
^{さいだん こうえい まえ た なんぢ とうぜん ふくはいさんえい たてまつ た もの} る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拝讚榮を奉るに堪うる者と
^{しゅさい なんぢみづか われらざいにん くち せいさん うた う なんぢ じんじ} なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を
^{もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ たましい からだ} 以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と
^{せい われら しょうがいぜんこう もつ なんぢ つと え たま せい} を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる
^{しょうしんぢよ こせい なんぢ よろこび な しょせいじん きとう よ} 生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) ^{けだしわ かみ なんぢ せい われら こうえい なんぢち こ せいしん けん いま いつ よよ}
 蓋 我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世
 に、



【 聖三祝文 】

せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い な る
 聖 神 聖 勇 毅 聖

じょう せい の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ め
 常 生 者 我 等 憐

よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い
 聖 神 聖 勇 毅 聖

な る じょう せい の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ
 常 生 者 我 等 憐

め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、
 聖 神 聖 勇 毅

せ い な る じょう せい の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
 聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 こ う え い は ち ち と こ と せ い しん
 光 榮 父 子 聖 神

に き す 、 い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。
 歸 今 何 時 世 世

せ い な る じょう せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
 聖 常 生 者 我 等 憐
 れ め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う
 聖 神 聖 勇
 き 、 せ い な る じょう せ い の も の よ 、 わ れ ら を
 殺 聖 常 生 者 我 等
 あ わ れ め よ 。

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國
 の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、)

【 提綱 (プロキメン) 生神女の歌 第3調 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

なんぢのしんにも。
 爾 神

司祭) 睿智、

誦經) 我が靈は主を崇め、我が神は神我が救主を悦べり。

わ が た ま し い は しゅ を あ が め 、 わ が し ん は
 我 靈 主 崇 我 神
 か み わ が きゅうしゅ を よ ろ こ べ り 。

誦經) 蓋其婢の卑しきを顧みたり、今より後萬世我を福なりと謂わん、

わがたましいはしゅをあがめ、わがしんは
我 靈 主 崇 我 神
かみわがきゆうしゅをよろこべり。
神 我 救 主 悦

誦經) わが^{わ たましい} 靈^{しゅ} は主^{あが}を崇め、

わがしんはかみわがきゆうしゅをよろこべり。
我 神 神 我 救 主 悦

【 使徒經 (アポストロス) 320 端 エウレイ書9章1節~7節 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{せいしと} 聖使徒パヴェルが^{じん たつ} エウレイ人に^{しょ よみ} 達する書の讀、

司祭) ^{つつし} 謹みて^き 聽くべし、

誦經) ^{けいてい} 兄弟よ、^{だいいち} 第一の約には^{やく} 奉事の例と^{ほうじ} 地に^{れい} 屬する^ち 聖所と^{ぞく} ありき。^{せいしょ} 蓋 ^{けだしだいいち} 第一の幕は^{まく} 設け

^{そのうち} られて、^{とうだい} 其内に^{あん} 燈臺と、^{きょうぜん} 案と、^{パン} 供前の餅と^{これ} ありき、^{せいしょ} 是を^{しょう} 聖所と^{だいに} 稱す。^{とばり} 第二の帷の

^{うしろ} 後に^{しせいしょ} 至聖所と^{しょう} 稱する^{まく} 幕ありき。^{ここ} 茲には^{きん} 金の^{こうろ} 香爐と、^{あまね} 徧く^{きん} 金を^{おお} 蔽いたる^{やくひつ} 約匱とあり、

^{そのうち} 其内に^{おさ} マナを^{きん} 藏めたる^{つぼ} 金の壺、^{きざ} アアロンの^{つえ} 萌せる^{およ} 杖、^{やく} 及び^ひ 約の碑あり、^{そのうえ} 其上に^{しよくざい} 贖罪

^{しょ} 所を^{おお} 覆える^{こうえい} 光榮の^{これら} ヘルヴィムありき。^{こと} 此等の事は^{いま} 今 ^{まつまびらか} 詳に^い 言うを^{もち} 庸いず。^{これら} 此等の物^{ものか} 斯

^{そな} く^{だいいち} 備わりて、^{まく} 第一の幕には^{しさいらつね} 司祭等^い 恒に入りて、^{ほうじ} 奉事を^{おこな} 行い、^{だいに} 第二の幕には^{まく} 獨^{ひとり} 司祭^{しさいちよう} 長

^{いちねん} のみ、^{ひとたび} 一年に^ち 一次、^{たづさ} 血を^い 攜え^{これ} ざるなくして^{おのれ} 入り、^{ため} 之を^{およ} 己の爲^{たみ} 及び^{あやまち} 民の^{ため} 愆^{けん} の爲に^{けん} 獻

ず。

(比較用 口語訳) 兄弟たちよ。初めの契約にも、礼拝についてのさまざまな規定と、地上の聖所とがあった。すなわち、まず幕屋が設けられ、その前の場所には燭台と机と供えのパンとが置かれていた。これが、聖所と呼ばれた。また第二の幕の後に、別の場所があり、それは至聖所と呼ばれた。そこには金の香壇と全面金でおおわれた契約の箱とが置かれ、その中にはマナのはいつている金のつぼと、芽を

出したアロンのつえと、契約の石板とが入れてあり、箱の上には栄光に輝くケルビムがあつて、贖罪所をおおっていた。これらのことについては、今ここで、いちいち述べるできない。これらのものが、以上のように整えられた上で、祭司たちは常に幕屋の前の場所にはいつて礼拝をするのであるが、幕屋の奥には大祭司が年に一度だけはいるのであり、しかも自分自身と民とのあやまちのためにささげる血をたずさえないで行くことはない。

司祭) ^{なんぢ} 爾 ^{へいあん} に平安、

誦經) ^{なんぢ} 爾 ^{しん} の神にも、ア ril イヤ、

【 ア ril イヤ 生神女第8調 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

ア ril イ ヤ 、 ア ril イ ヤ 、
ア ril イ ヤ 。

誦經) ^{ぢよ} 女よ、^{これ き} 之を聴き、^{これ み} 之を觀、^{なんぢ} 爾 ^{みみ} の耳 ^{かたぶ} を傾 けよ、

誦經) ^{みんちゆう} 民 中 ^と の富める者 ^{もの} は ^{なんぢ} 爾 ^{かんぼせ} の 顔 ^{おが} を拜まん、

司祭) (黙誦: ^{ひと} 人を ^{あい} 愛する ^{しゅさい} 主 宰 ^わ よ、^{こころ} 我が ^{かみ} 心 ^し に ^{ちえ} 神 ^{いさぎよ} を知る ^{ひかり} 智慧 ^{かがや} の 淨 ^わ き ^{しねん} 光 ^わ を 輝 ^{しねん} かし、我が思念

め ひら なんか ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ
 の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠を
 おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ ところ
 畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所
 おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ
 を思い且つ行いて、属神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、
 なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいぜん
 爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし
 いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ
 て生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世世に、アミン。)

【 福音經 (エヴァンゲリオン) ルカ福音書 54 端 10 章 38~42 節、11 章 27~28 節 】

司祭) 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) ルカ傳の聖福音經の讀、



司祭) 謹みて聴くべし、彼の時、彼等が行ける時、イイスーの村に入りしに、或婦マル

ファと名づくる者、彼を其家に迎えたり。其姉妹にマリヤと名づくる者あり、イイスの足
 下に坐して、其言を聴けり。マルファは供事の多きに因りて心を煩わし、就きて曰え
 り、主よ、我が姉妹、我一人を遺して供事せしむるを爾意と爲さざるか、之に命じて、
 われたす 我を助けしめよ。イイス彼に答えて曰えり、マルファよ、マルファよ、爾は多くの事を
 おもんばか 慮りて心を勞せり、然れども需むる所は一のみ。マリヤは善き分を擇びたり、是
 かれ うば べ これいときひとり おんなたみ うち こえ あ かれい なんぢ
 は彼より奪う可からず。此を言う時、一の婦民の中より聲を揚げて、彼に謂えり、爾
 はら はら なんぢ す ち さいわい かれい しか かみ ことば き これまも
 を孕みし腹と爾が嘔いし乳とは福なり。彼は曰えり、然り、神の言を聴きて之を守

もの ^{さいわい}
る者は 福 なり。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえいは
主 光 榮 爾 歸 し、 光 榮
はなんぢにきす。
爾 歸

(比較用 口語訳) イエスがある村へはいられた。するとマルタという名の女がイエスを家に迎え入れた。この女にマリヤという妹がいたが、主の足もとにすわって、御言に聞き入っていた。ところが、マルタは接待のことで忙がしくて心を取りみだし、イエスのところにきて言った、「主よ、妹がわたしだけに接待をさせているのを、なんともお思いになりませんか。わたしの手伝いをするように妹におっしゃってください」。主は答えて言われた、「マルタよ、マルタよ、あなたは多くのことに心を配って思いわずらっている。しかし、無くてならぬものは多くはない。いや、一つだけである。マリヤはその良い方を選んだのだ。そしてそれは、彼女から取り去ってはならないものである」。イエスがこう話しておられるとき、群衆の中からひとりの女が声を張りあげて言った、「あなたを宿した胎、あなたが吸われた乳房は、なんとめぐまれていることでしょう」。しかしイエスは言われた、「いや、めぐまれているのは、むしろ、神の言を聞いてそれを守る人たちである」。

※聖体礼儀③ (金口イオアン聖体礼儀) へ